一「心身二元論」の近代科学が人間に与えた影響

1　近代文明・科学と人間の問題

一、「こうも頭で生きる人が多くなってしまった」
二、「気のしっかりした人がいなくなった」
三、「たましいという言葉が使われなくなった」
四、「このままいくと頭のおかしい人が増える」
五、「いきなり刺す人が出てくる」

これら五つの言葉は、高度経済成長時代末期・一九七〇年代（昭和四十年代後半）の師野口晴哉の言葉です。

この中でも、一、**「こうも頭で生きる人が多くなってしまった」**という言葉は、戦後の高度経済成長（一九五四・昭二九～一九七三・昭四八年）社会と、これに適応した「科学的教育（科学知識の詰め込み教育）」の問題を特に象徴していたと思います。

二と三は精神性や人間力の衰退を示唆していました。

四と**五**は、師が、将来の人々の「心の不安定さ」を見越したものです。没（一九七六年）後三十五年を経た今日、ついに、五つ目の言葉が現実となり、頻繁にテレビニュースの冒頭を飾るようになってしまいました。

そして、これらの言葉の背後には**「愉気が行われなくなったのです」**というもう一つの言葉がありました。

野口整体の技術としての愉気法は、直接人の体に触れるものですが、この場合の「愉気」とは、「気遣い」や「心の通じ合い」という、他者との「気のつながり」を意味しています。

日本では一九七〇年、大阪万国博が開かれ、科学技術の進歩に対するバラ色の夢が謳われたのですが、この年を境に科学技術の影の面も大きくなってきました。化学物質による公害などの環境破壊とともに、教育の荒廃などの現象が目立つようになってきたのです。これは科学的社会の進展による、物質的豊かさの過剰から心の問題が見失われてきたことを示しているようです。

師は、人の心が「意識、つまり頭に偏ってしまった」という内なる「環境破壊」が現実化してきたことを示し、将来を見越して言葉を遺されたのです。

さらに、科学によって宗教性が駆逐された現代、世界的な問題として「地球温暖化」、そして身心の問題に対

して「スピリチュアリズム（霊性）」が共有されるようになりました。

近代科学知と伝統宗教智の統合が世界的に求められる時代となったのです。

第一章で述べたように、**私は五氏の著作を通じて、師野口晴哉より教えを受けた間**（一九六七年～七六年）**に、何気なく理解していた「近代文明・科学と人間の問題」を明確に捉えるようになりました。**

そして本章冒頭にある、私がこの道に入って四度目の正月潜在意識教育法講座（一九七一年）で、師は、科学である「生理学・心理学」あるいは「体育」を批判しています。

師はこの講座で、さらに「人間が一人一人だという当たり前のことも学問としては存在していないのです。**要するに個人がないのです。人とか、民衆とか、大衆とか、国民とか、人民とか、そういう名の下にあるだけで、一人一人というものは学問の対象になっていないし、まして一人一人の体の内容や心の内容は全部学問ではないのです。**」と述べています。

「**人**」は生物学、「**民衆とか、大衆とか、国民とか、人民**」は社会学や政治学、法学という科学による概念です。

今著の内容、特に本章は、このような師の教えが、私において長年かかって花開いたものです。当時、野口整体が、社会的に歴史的にどのようなものであり、そして、科学がどのような体系であるかなど考えることすらなく、また考える力もなかったわけですが、教えを受けた間に今著の基となるものが私の潜在意識に播かれていたのです。今更ながらに、講義で「潜在意識に何気なく語りかける」という師の「心の力」に深遠な思いを感ずるものです。

2　自分と、自分の体が分かれている

十年以上前、ある難病を患った四十代前半の女性の例です。

半年程の間、個人指導に数回通ったのですが、その後一年余りの間途切れていました。改めて、個人指導を始めたいということで、この時（二〇一一年七月）次のように話をしたのです。